

◇ 国 語

国 6-1～国 6-17 まで 17 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

大人と子ども、男と女、神と悪魔、戦争と平和、光と闇、夏と冬など、ヨーロッパ文化はそれぞれのケジメがみごとにはつきりしており、日本の墨絵の世界とは対照的である。コンピュータはゼロと一しか知らない哀れな機械だが、これまたヨーロッパ文化そのもので、オンとオフ、光と闇、イエスとノーの、単純な二者択一の世界に生きている。

日本美は、コントラストのはっきりしない情景のなかに追求されており、たとえば梅雨どきの緑など、明るい緑、暗い緑が雨に濡れて鮮かなノウタン^Aを形づくり、じつに美しい。つまりは間接光が影の部分にも回るからであり、女性の洗い髪が室内で美しく見えるのも同じである。敵と味方、光と影、男と女が互いに細かな形でにじみ合い、ケジメをつけ一線を画することのないところに、日本文化の良くも悪くも基本的な特徴の一つがあることは、確かであろう。

ヨーロッパ文化は、事物をはつきりと光と影、明と暗に二分してしまう。乾いた空気と直射日光の世界に生きている。これに対し日本文化は、湿った空気と間接光の世界に生きている。

ヨーロッパ人はどうしてこうケジメをつけたがるかといえ、右に述べた自然の諸条件の違いのほか、人間の違いもコウリヨ^Bに入れなければならない。それは彼らが本質的に行動的で「作る人」であるのに対し、私たち日本人は、本質的に作るのが嫌いで、良い環境にジツとしているのを好むからである。

劇的、ドラマチックな人間関係といえ、日本では文字通り演劇とか小説、テレビ、映画のなかにしかない。要するに「絵空事」でしかない。テレビや小説では、人々の顔の表情も豊かだし、人々はよく喋^{しゃべ}って「劇」が快調に進行してゆくが、現実の人間関係では決してそのようなことはない。組織に生き、調和に生き、全体性のなかに自分を合わせて生きようとし、心では泣いても顔には笑みをたたえているのが日本人である。

ところが、ヨーロッパ人が「ドラマ」といえば、それは「掴みあい」^Cのことで、日々展開されている日常茶飯事である。自他の違いは髪の毛や目の色から一目瞭然^{りょうぜん}で、その上に立って、現実逆らい、他人に逆らい、自然に逆らいながら、戦いに生き、創造に生きようとするから、どうしてもあちこちに軋轢^{あつれき}が生じ、人生がドラマチックにならざるをえない。

ヨーロッパ人が演劇を好むのは、そこに人生の ア を見出すからである。反対に日本では若い人しか演劇、芝居を見

に行かないのは、日ごろ動かぬ人、作らぬ人が、それでも若いうちは夢を追い、非日常的な変わった考え、変わった行為、変わった人物を舞台に見出そうとするからだろう。与えられた環境に自分を合わせることには、抜群の能力を発揮するが、一人一人が現実の環境を **イ** するのは大の苦手で、自然保護とか環境保全は唱えても、欧米人のように自然を創り出すとか、自然を創り変えるという話になると、「滅相もない」ということになる。

人間のことをホモ・ファール、つまり、「作る人」であるとするのは、欧米人の場合である。私たち日本人にとっては、「作る」のはむしろ必要悪で、作った後の心地良い状態に身や心を浸らせるための、やむをえない苦痛である。その証拠に、たとえば大伽藍を建立するとなれば、自分の目の黒いうちにそれが完成されないと、死んでも死にきれない。もしそんなことになったら、魂が成仏できずにさまよってしまう。新しい大伽藍のなかに一刻も早く身を横たえたい、そのためにはやむなく苦痛を忍ぶというのが本心だからである。

ところがヨーロッパ人は、大伽藍が未完のまま喜んで死ぬことができる。それは「作る」、すなわち自然とか現実と戦いながら新しい物とか事態を作り出してゆくということそれ自体が、彼らにとっては嬉しく、また人生の目的であるからだ。事実、ヨーロッパ中世のカテドラル（大聖堂）は、パリのノートル・ダムの場合、一二世紀から一四世紀の二〇〇年を要しており、ケルンの大聖堂にいたっては、なんと一三世紀から一九世紀の六〇〇年を必要としている。そこでは沢山の人々が未完のまま死んでいるが、それゆえにこそ彼らは死ぬまで作りつづけられるという、充実した生を送ることができたのであった。

これに比べると、私たち日本人は作るとか創造するとかが嫌いであり不得手である。いま世界中に売れている日本の自動車とかオートバイ、カメラや電卓、テレビその他も、私たちが欧米のものを丹精して手直ししただけで、自ら創り出したものはない。

以前、「私作る人、ぼく食べる人」というラーメンのコマーシャルが、女性差別だと槍玉やりだまに上がった。これなど、日本人がいかに作るのを嫌い、必要悪と考え、苦痛に思っているかを、よく表わしている。料理を作る喜びとか誇りとかがあれば、絶対に起こることのない非難である。そして、あちこちで花盛りの文化講座などに身と心を横たえる前に、何よりもまず自分で料理を作ること喜びと誇りを見出す女性——もちろん男性も同じことである——こそ、間違いなく創造的であるということができらるう。

しかしそういう人は、今日やはり稀少価値⁽⁶⁾である。若い人たちは、編集者になって人にもものを書かせることはやりたがっても、自ら書き手に回る人は少ない。職人の仕事を誉め称えはするが、自ら職人になろうとする人は少なく、職業専門学校に入ろうという人も決して多くはない。手工業に生きる職人魂がいまなお健在なヨーロッパとの、大きな違いである。

しかしそのヨーロッパでも、時代を通じてつねに自他のケジメや男女のケジメ、大人と子どものケジメ、人間と自然、人間と動物のケジメなどがはつきりしていたわけではない。ケジメ人間の姿が明確になってくるのは近世、ことに一七世紀ぐらいからのちのことである。それ以前の中世ヨーロッパでは、植物の葉一枚が同時に人間の顔でもあるような、つまり、葉に目鼻がついている「葉人」のロマネスク彫刻があり、またコクモツをむさぼり喰う羽虫の顔に、牙と角を持った恐ろしい人間の顔が、一〇、一一世紀には描かれている。そしてこれらの昆虫や、中世末にペストの「破門」の憂き目に遭っているのである。

「そんなはずはないでしょ。だって虫やネズミは、人間と違って魂を持たないんですもの。魂の刑罰なんか受けるわけないでしょ」

一九八一年の四月初め、マルセイユ大学の電子工学教授、ビカール氏宅で「ネズミの破門」について話したら、教授夫人が率直に疑問を提出した。しかし一五四〇年のフランスでは、教会当局が現実にネズミをペスト禍の犯人として破門している。ところが人間様の場合には、破門された者はキリスト者の世界から締め出され、打ち殺されても仕方がないというわけで大いに効き目のあるこの刑罰が、ネズミには当然のことながらサツパリ通用しない。相変わらずこの辺りをチヨロチヨロ走り回って、野の作物などを荒らしている。参りました、恐れ入りましたという態度を見せず、まるで反省の色がないのである。

どうしてなのか、と教会当局は考えた。これは手続きの点で欠けるところがある故ではないか。破門という重大な精神的刑罰を課す以上、まず破門されるネズミの言い分をよく聞く必要がある。その正式手続きを省略してしまったからネズミは参らないのだということになり、教会はネズミに召喚状を発し、教会で言い分を申し立てるように、と命令するのである。

ところが、いっこうにネズミは教会に「エ」しない。相変わらず畑や人家を荒らし回るばかりである。どうしてネズミは教会にやってこないのか。教会当局はまた考えた。

答えは、つぎのようなものだった。ネズミは教会にくる意志があり、教会に行きたいのだが、道路の安全が保証されていない。

つまり途中でネコが待ち構えていて、ネズミの通行をボウガイする^{ボウガイ}ため、ネズミは教会にすることができない。だから教会は、ネズミの言い分を聞くことができず、したがって破門を宣告することができない。というわけで、結論として破門は無期延期になった。

動物が人を殺傷するなどの「犯罪」を犯した場合、ヨーロッパでは中世から一七世紀まで、動物が裁判にかけられ、処刑されている。中世末のラン市（パリ東北二〇キロ）では、サン・マルタン修道院所領内に住む農民が、豚に赤ん坊をかじられ、殺されたというので修道院に訴え出た。その結果、修道院は事実関係を慎重にシンリ^Eしたうえで、「被告人」である豚に対してつぎのような判決を下した。

現在、修道院の牢内に鍵^{かぎ}をかけられ、縛られて拘束中の豚は、公けの絞首刑執行吏により木造絞首台において、死にいたるまで首くくらすべきである。

男と女の法的・社会的なケジメについても、ほぼ同様なことがいえる。女は身体も頭も弱い——「弱き性」（インベキリタス・セクス）と「弱き頭」（インフィルミタス・コンシリイ）——から、男によって保護され、支配されねばならない、「男は誰でも家のなかでは領主であり君主である」といった考え方がオと打ち出され、女性が無権利状態に置かれていた。男のケジメがはっきりとしたのは、一六世紀からのことである。そして一九世紀から二〇世紀前半まで、その状態が原則としてつづけられた。つまりヨーロッパでは近代において、男女のケジメが最も強く意識されたことになる。一八世紀の偉大な思想家ジャン・ジャック・ルソーですら、男は成人すれば声も顔かたちも変わるのに、女はいつまでたっても、声も顔かたちも子どもと同じだといっている。近代における大思想家が、ひとしく女性については、子どもと同じ扱いにしており、男によって支配され、保護されるべきだと考えているのは注目に値する。

中世の女は、もっと主体的に行動していた。男女の法的・社会的なケジメは、近世・近代ほどははっきりしてはいない。ことに夫が不在とか、夫の身体はそこにあるのだが頭が不在——心身喪失——といった場合には、妻が必要な法律行為を行うことができた。そしてときと場合によっては、夫に代わって決闘までやってのけたのである。

一七世紀ごろからのヨーロッパに、ケジメ人間がはっきり出てくるのはなぜであろうか。それは当時が、ヨーロッパ史上最悪の天候に見舞われていたことと深く関係している。つまりヨーロッパは史上最底の寒冷期に入り、雨と雪と氷に覆われて、小麦

も葡萄も穫れなくなり、「われらをペストと飢えと戦争から救い給え」という祈りの声が、ヨーロッパ中にこだました。

一七世紀には一〇〇年のうち九七年、ヨーロッパのどこかで戦争があり、誰もが孤独にさいなまれ、疑心暗鬼となつて、魔女狩りが盛行した。このような禍いは、悪魔の手先である魔女が仕掛けているに違いないというわけで、当時、ヨーロッパで三〇万人の女性が犠牲になつたといわれる。魔女をノロノロと生木で焼く黒い煙は、ヨーロッパの空を暗く覆つたのであつた。

この一人ぼっちという、史上最悪の孤独感、不安感が、人々の自己防衛本能をフルにかき立て、嗅覚を発達させ、自助の精神を起こし、自ら創る創造的人間と、他人は他人、自分は自分というケジメ人間を生み出し、苦しみの中から近代を開いていくことになる。

（木村尚三郎『ケジメの時代』による。複数個所に中略あり）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ノウタン

- ①時間をタンシユクする
- ②イッタン停止する
- ③タンパクな味
- ④カンタンな問題
- ⑤結果を聞いてラクタンする

1

B コウリョ

- ①コウテイ表を作る
- ②大気汚染についてコウサツする
- ③よい関係をコウチクする
- ④コウリョウとした原野
- ⑤オンコウな人柄

2

C コクモツ

- ①正確なジコク
- ②ザンコクな犯罪
- ③コクメイな内容
- ④ゴコクほうじょう豊穡
- ⑤料理にコクトウを用いる

3

D ボウガイ

- ①イガイな結末
- ②ダンガイ裁判
- ③社会にガイアクを及ぼす
- ④世情をガイタンする
- ⑤ガイサンで請求する

4

E シンリ

- ①シンリ学を学ぶ
- ②税金をシンコクする
- ③クッシン運動
- ④シンサの結果
- ⑤シンライを裏切る

5

問二 空欄

ア

イ

ウ

エ

オ

からそれぞれ一つずつ選ぶ。

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中

ア

①感動

②縮図

③奇跡

6

④明暗

⑤矛盾

イ

①変革

②創作

③演出

7

④開発

⑤展開

ウ

①環境

②元凶

③仲間

8

④影響

⑤結果

エ

①参拝

②出陣

③参詣

9

④出頭

⑤決起

オ

①公然

②決然

③悠然

10

④必然

⑤泰然

問三 傍線 (a)・(b)・(c) の意味として最も適当なものを、次の各群の①～④の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

(a) 日常茶飯事

① 毎日の食卓に並ぶ常備食

② 常に起こっている当たり前のこと

③ 食事の時の決まった約束事

④ 好きな食べ物を奪い合うこと

11

(b) 稀少価値

① 価値の基準があいまいであること

② 値段を下げて購入しやすくなったもの

③ 数が少なく珍しくて値打ちのあるもの

④ そのものの価値がきわめて少ないこと

12

(c) 疑心暗鬼

① 相手のために心を鬼にすること

② 信用がないため疑いの心が生じること

③ 人間の心に巣食っている悪い心

④ 心の中に映し出される亡霊

13

問四 本文の内容と主旨が異なるものはどれか。次の①～⑥の中から二つ選べ。

14

15

- ①ヨーロッパでは近世や近代よりも却^{かえ}って中世の方が女性が主体的に行動しており、中には夫に代わって決闘する妻までいた。
- ②日本人があまり演劇や小説、テレビ、映画などを好まないのは、その内容が日本人の生活の実情からかけ離れているからである。
- ③ヨーロッパにケジメ人間が登場した背景には天候不順や戦争による飢餓や孤独感があり、自己防衛の必要があったからである。
- ④日本人は「作る」行為を下に見る傾向があり、たとえば料理をすることに喜びや誇りを見出すことが少ない。
- ⑤ヨーロッパ人は自然や現実と戦うことが苦手で、長い時間をかけて物を作り出すことはとても不得手である。
- ⑥ヨーロッパで人間と自然や戦争と平和、光と闇、夏と冬などのケジメがはっきりしたのは一七世紀ごろからである。

問四 本文の内容と主旨が異なるものはどれか。次の①～⑥の中から一つ選べ。

14

- ① ヨーロッパでは近世や近代よりも却^{かえ}って中世の方が女性が主体的に行動しており、中には夫に代わって決闘する妻までいた。
- ② 日本人があまり演劇や小説、テレビ、映画などを好まないのは、その内容が日本人の生活の実情からかけ離れているからである。
- ③ ヨーロッパにケジメ人間が登場した背景には天候不順や戦争による飢餓や孤独感があり、自己防衛の必要があったからである。
- ④ 日本人は「作る」行為を下に見る傾向があり、たとえば料理をすることに喜びや誇りを見出すことが少ない。
- ⑤ ヨーロッパ人は自然や現実と戦うことが苦手で、長い時間をかけて物を作り出すことはとても不得手である。
- ⑥ ヨーロッパで人間と自然や戦争と平和、光と闇、夏と冬などのケジメがはっきりしたのは一七世紀ごろからである。

問四 本文の内容と主旨が異なるものはどれか。次の①～⑥の中から一つ選べ。

14

- ①ヨーロッパでは近世や近代よりも却^{かえ}つて中世の方が女性が主体的に行動しており、中には夫に代わって決闘する妻までいた。
- ②日本人があまり演劇や小説、テレビ、映画などを好まないのは、その内容が日本人の生活の実情からかけ離れているからである。
- ③ヨーロッパにケジメ人間が登場した背景には天候不順や戦争による飢餓や孤独感があり、自己防衛の必要があったからである。
- ④日本人は「作る」行為を下に見る傾向があり、たとえば料理をすることに喜びや誇りを見出すことが少ない。
- ⑤ヨーロッパ人は自然や現実と戦うことが苦手で、長い時間をかけて物を作り出すことはとても不得手である。
- ⑥ヨーロッパで人間と自然や戦争と平和、光と闇、夏と冬などのケジメがはっきりしたのは一七世紀ごろからである。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

西洋文芸の本質は説得（饒舌^{じょうぜつ}）にある。それに対して日本文芸の本質は黙説（寡黙）にある。黙説とは聞かない言葉だが、省略、含意、暗示、ほのめかしなど能^{あた}うかぎり言葉をヨクセイ^Aした表現全体を指す。西洋人は基本的には他人は自分とは異なる人間（異人）と見なす。だから自分の考えに他人を同意させる必要があると考える。他人に分かつてもらうために言葉を尽くして自分の考えを伝えようとする。説得である。それに反して日本人は他人は自分とおなじ人間（同類）と考える。だから余計なことは言わない。暗黙の前提に寄りかかる。

私にいわせれば、西洋文化の基底には「対決」のスタンスがある。その「対決」は神対人間（宗教Ⅱ契約）、人間対自然（科学Ⅱ合理主義）、人間対人間（個人主義）という形で現れる。こうした緊張したスタンスこそが饒舌な西洋文化を導いてきたのである。

もちろん、これには理由がある。

（二）説得は西洋人にとって生きてゆくうえで大切な技術である。海に囲まれ、ア 同質的な人間の集まりである日本と違って、ヨーロッパは民族や言語や文化を異にする多くの国々が狭い地域にザツキョ^Bしている。他人はどここの馬の骨とも知れない。なにを考えているのか分からない。自分とは別の考え方をしている（にちがいない）。他人は「異人」である。だから、自分の考え方を相手にきちんと説明して相手から同意を取りつける必要がある。説得の出番である。必要とあらば手を替え品を替えて説得にこれ努める。ちなみに、世界で一番長い説得をご存じだろうか。おそらく、トルストイの『アンナ・カレーニナ』ではないだろうか。なにしろ、厚めの文庫本にして三冊にも及ぶあの長大な作品は、冒頭の数行の主張を読者に説得するためだったのだから。「幸福な家庭はすべて互いに似かよったものであり、不幸な家庭はどこもその不幸の趣きを異にするものである」（木村浩訳）。

イ

日本では事情が異なる。「和をもって貴しとなす」——「個」よりも「集団」の論理が優先する日本的風土ではだ

れもが「同じこと」を考えるように強いられる。出る杭は打たれる。こうした精神的風土では説得（饒舌）の出る幕はない。「以心伝心」「あうんの呼吸」「根回し」が一番である。説得（理屈）はとかく煙ったがられる。野暮である。寡黙やよしである。「も

のいへばくちびる寒し秋の風」（芭蕉）か。
こうした言語へのスタンスの違いは芸術形態にもトウエイされる。

ウ 見て日本文芸の典型は、散文は「随筆」、韻文は「和歌」である。古来、日本人は心の想いを和歌に、思想の表白を随筆に託してきた。この二つは日本人がもつとも親しみ愛好してきたジャンルである。だがこの両者に対応するものは西洋にはない。その意味で随筆と和歌はわが国特産である。だがこういって、すぐ反論が予想される。いや、西洋にだってエッセーがあるじゃないか。短詩があるじゃないかと。なるほど形のうえでは似ている。だが、内容的にはまったく別物である。

まず、随筆から見ていこう。

『枕草子』『徒然草』『玉勝間』—— エ 随筆の古典を考えてほしい。そこには全体を律する必然的なプランはない。

あるのはてんでばらばらな話題の寄せ集めである。また、分量的にも長短さまざま、概して短い断章からなる。一番学問的内容をもつ本居宣長の著作にしているからが深い学殖の羅列である。和文で書かれた文章が主だが、時に漢文の断章が混じり込んでくる。日本の随筆には「部分」を統括する「全体」の視点（巨視的視座）がどこにも見られない。ただ「部分」が「つれづれなるままに」集められ、「部分」の寄せ集めの結果として「全体」が形をなす。要するに随筆は断片の偶然的な集合なのである。

それに引きかえ、西洋のエッセーは確かに形式的には自由だが、ある主題をめぐって、ある程度の長さをもった断章が、ある程度の相互の **オ** のもとに配列・配置されている。緩やかであるにしても、建築的なプラン（全体の構図）は見られる。

こういうエッセーを読み慣れた西洋人が日本の随筆を読んだら、そのあまりのずさんさと雑駁さに啞然とするのは当然である。

こうした彼我の違いはどうして生まれるのか。それは「全体」と「部分」に対するスタンスの違いに求められる。西洋人は「全体」あつてこそその「部分」であると考え、日本人は「部分」あつてこそその「全体」と考える。いや、「全体」など眼中にないと
言うべきだろう。日本人は「部分」にこだわる。「全体」は後からついてくるものであり、偶然的なものの結果でしかない。

こう書いてふとあることに思い当たった。日本人の絵の鑑賞法である。絵を鑑賞する場合、日本人は絵に近寄る。大きな絵の前でもそうだ。西洋人は日本人よりも絵から離れて立つ。この鑑賞法の違いは、若い頃パリに遊学したときルーブル美術館で目撃した。

後ろへ引かないと絵の「全体」は見えてこない。「日本の美術家は小さなものにおいては偉大であるが、偉大なものにおいては小さい」(A・イースト)。「日本人」と読み替えても十分通用するだろう。

次に和歌である。

いま紹介した評言を少し書き換えてみよう。「西洋人は小さなものに感動しないが、大きなものに感動する」。これが西洋人のスタンスである。西洋では長いもの、大きなもの、派手なものが好まれる。小品よりは大作のほうが評価が高い。おとなしい表現より音吐朗々たる派手な表現が受ける。しかしこれに反して日本人は短いもの、小さなもの、地味なものに引かれる。短歌や俳句といった短詩型文学のリュウセイがそのなよりの証拠である。日本文芸は古来、和歌という抒情詩を軸にして発達してきたと考えると大過ないが、究極的には三十一文字をぎりぎりの十七文字までギョウシユクした。おそらく俳句は世界で最小の定型詩だろう。十七字の俳句など西洋人の目から見れば長めの表題にしかすぎない代物だ。『省察』^四と言いつつ習わされているデカルトの書物の正式な書名は『神の存在、および人間の霊魂の身体からの区別を論証する第一哲学についての省察』である。西洋的な発想からすれば、ロマン(長編小説)に行きついた物語に見られるように芸術様式は発展してゆくうちにふくらんでいくのが普通である。ところが、日本の歌はどんどん小さくなった。不思議である^四と西洋人なら考えるだろうが、不思議でもなんでもないので。日本人は小さいものが好きなのだ。先ほど指摘した「部分」へのこだわりと同根である。

あの「黙説」への傾斜とこの「部分」へのこだわりが連携して、日本語の論理を作り上げることになる。

(野内良三『偶然を生きる思想』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ヨクセイ

- ①代金をセイサンする
- ③憲法をセイテイする
- ⑤反乱軍をセイトウする

- ②外交のセイサクをたてる
- ④機械をセイゾウする

16

B ザツキヨ

- ①要地をセンキヨする
- ③ケンキヨに反省する
- ⑤インキヨして静かに暮らす

- ②近來まれに見るカイキヨ
- ④訪問先をジキヨする

17

C トウエイ

- ①爆弾をトウカする
- ③液体がトウカする
- ⑤トウアンを採点する

- ②トウカナ物と交換する
- ④建造物がトウカイする

18

D リユウセイ

- ①リユウコウをとり入れる
- ③土地がリユウキする
- ⑤リユウトウ蛇尾のような演説

- ②外国へリユウガクする
- ④砂のリユウシが細かい

19

E ギョウシユク

- ①あまりのことにギョウテンする
- ③スポーツ界にギョウセキを残す
- ⑤魚のギョウシヨウをする

- ②各界の事情にツウギョウしている
- ④一点をギョウシする

20

問二 空欄

ア

イ

ウ

エ

オ

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中

からそれぞれ一つずつ選べ。

ア

① 恒常的

② 圧倒的

③ 表面的

21

イ

① それでも

② ところが

③ したがって

22

ウ

① 一般的に

② 組織的に

③ 巨視的に

23

エ

① 日本的な

② 愛好的な

③ 本質的な

24

オ

① 関連性

② 依存性

③ 独立性

25

④ 比較的

⑤ 普遍的

④ もちろん

⑤ にもかかわらず

④ 精神的に

⑤ 部分的に

④ 歴史的な

⑤ 代表的な

④ 理論性

⑤ 連続性

問三 傍線部(一)「説得は西洋人にとって生きてゆくうえで大切な技術である」の理由として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

26

- ①ヨーロッパは、海に囲まれ同質的な人間の集まりである日本とは根本的に異なり、どこかの馬の骨とも知れない他人の集まりであるから
- ②ヨーロッパ人は、トルストイの『アンナ・カレーニナ』のように自分の主張を滔々と述べるのが好きであるから
- ③ヨーロッパには、言語・文化を異にする多くの民族が一緒に住んでいるので、自分の考え方を相手にきちんと説明することが必要だから
- ④西洋文化の基底には「対決」のスタンスがあり、その対決は神対人間、人間対自然、人間対人間という形で現れるから
- ⑤西洋人は基本的に他人は自分とは異なる人間とみなし、他人を説得して屈服させなければならないから

問四 傍線部(二)「その意味で随筆と和歌はわが国特産である」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選

べ。

27

- ①随筆はエッセーとして西洋にも存在するが、内容的には日本の随筆とは全く異なる。
- ②日本の風土では「個」よりも「集団」の論理が優先するので、だれもが「同じこと」を考えるように強いられる。
- ③日本では説得するということは煙たがられ、「以心伝心」「あうんの呼吸」が好まれ、これが和歌や随筆となった。
- ④日本人は古来、心の想いを和歌に、思想の表白を随筆に託してきて、この二つを最も愛好している。
- ⑤随筆と和歌は「個」よりも「集団」の論理が優先する日本的風土の中で育ってきた。

問五 傍線部(三)「それは「全体」と「部分」に対するスタンスの違いに求められる」の意味として最も適当なものを、次の

①～⑤の中から一つ選べ。

28

①日本人は絵を鑑賞する場合、絵に近寄って見るが、西洋人は絵から遠く離れて立つ。

②西洋人は「全体」あつての「部分」であると考える一方、日本人は「部分」にこだわり「全体」を見ようとしなない。

③日本の随筆には「部分」を統括する「全体」の視点が全くなく、断片の集合となっているにすぎない。

④西洋のエッセーは形式的には自由だが、ある程度の長さをもった断章が全体的な構図の中に配置されている。

⑤全体の構図を持ったエッセーを読みなれた西洋人が日本の随筆を読んだら、そのずさんさと雑駁さに驚く。

問六 傍線部(四)「不思議であると西洋人なら考えるだろうが、不思議でもなんでもないのだ」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

29

①西洋人は小さなものには感動しないが、大きなものに感動するという単純な民族性を持っている。

②日本で発展してきた和歌や俳句といった短詩型文学は西洋人には全く理解できない代物である。

③西洋では長いもの、大きいもの、派手なものが好まれるが、日本では短いもの、小さいもの、地味なものが好まれるというのは日本人にとって当然である。

④西洋の発想では長編小説に見られるように、芸術様式は発展してゆくうちにどんどんふくらんでいくのが普通である。

⑤日本文芸は古来、和歌という抒情詩を軸にして発達してきたが、究極的には三十一文字をぎりぎりの十七文字に縮めた。

問七 この文章に付ける題名として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 日本文芸の論理
- ② 西洋と日本
- ③ 説得と黙説
- ④ 日本の和歌と随筆
- ⑤ 東西比較文化論